

## 二〇一九年度文部科学大臣賞審査概要

令和元年度の文部科学大臣賞の選考は、平成三十年四月一日より同三十一年三月三十一日のあいだに刊行された、連歌・俳諧、および近代俳句に関わる著作について、委員会の審議をおこなった。選考の経緯は、まず一年間の俳諧関係の著作をほぼ網羅したうえで、そこから十点の候補作を選んだ。これら十点を、七月から八月にかけて各委員が査読、その結果を八月七日の委員会の場に持ち寄って、学問的見地から忌憚のない意見を交換しながら慎重審議を重ねた。その結果、今年度は受賞著作なしの結論を得た。異例の結論となったが、過去にも同様の事例があることを確認し、いずれの著作も大臣賞に該当する著作とは認められないことが同意された。以下、審査の概要を記述して報告とする。

最初に各委員が、候補作のうち、推薦に値する著作の二点を挙げて、それぞれその理由を口頭でのべた（補足的に三点目を挙げる委員もあった）。そのなかから、複数の推薦が重なったものを中心に、特筆されるべき意義、および指摘された問題点を記述する。

『笈の小文の研究 評釈と資料』は、芭蕉の紀行文のなかで、成立事情や内容に関して、抜き差しならない謎を残す『笈の小文』に関する、本格的な研究書である。芭蕉自筆もしくは清書に相当する本文を持たない本作は、きわめて文学性に富む紀行文でありながら、従来から作品としての扱いに問題がつきまわっていた。本書では、宝永六年（一七〇九）の跋文をもつ版本（乙州本）を原本に準ずるテキストと見定めて、資料を細大漏らさずに博搜し、旧説を検討・批判したうえで、全文にわたって評釈が加えられている。資料にできるだけ忠実にもとづくことを旨とし、実証性を重んずる立場は、研究書として高く評価されてしかるべきである。また、本文の問題点について、版本というテキストを重視して、解釈の一貫性を求めようという姿勢も一定の説得性をもつものと評価される。

その一方で、見過ごしにできない疑問を有することもまた否定できない。たとえば、本書を翻読する際、かならず不審を抱かせる、紀行文としての疑義ある個所を評釈するにあたって、いささか強引とも思われる、説得性に欠ける解釈がみられることがある。また、多数の芭蕉自筆資料を駆使して解明に当たろうとする姿勢は理解できるが、それら資料が『笈の小文』の文学性につなげた考察がなされていない。発句主体の『野ざらし紀行』の紀行句集的形態から、文章主体の『奥の細道』の紀行文形式へと移行する中間にあつて、レイアウトの変化を芭蕉自身がどう意識していたかにまったく触れられていない。さらには、版本に付属する「更科紀行」についても、いっさい言及がないのも問題となる。画期的な研究成果であることは否定できないものの、小さからぬ疑義の存在をもって、受賞作には至らなかった。

今回、従来とはやや趣のかわった著作がいくつか候補作となった。その一つが、昨秋柿衛文庫で催された「芭蕉の手紙」展の図録である。特筆すべきは、全六十三点もの作品・資料が出品されたことで、なかでも芭蕉の書簡が二十四点集められたことは一つの快挙といえる。伝えられる書簡のおよそ一割が一堂に集まったことになる。それらをほぼ年代順

に配列して、図録として一書にまとめられた。それはたんに展覧会の記録としてのみならず、後世の研究にも寄与する価値をもつものといつてよい。さらには、原文に忠実であることを旨としつつも、一般の見学者の便を考慮して、読みやすさに重きを置いた編集がなされていた。専門性のたかい展覧会図録のありかたとして、一定の範を示したといつてさしつかえない。

そのような意味で、本図録を受賞作におす声があつた一方、いくつかの点で致命的な欠陥も指摘された。発句の作品解釈などに難点があり、読解をもう一步深めることが望まれた。また、和歌ではカラスをよまない、という一文は完全な間違いである。多数とはいえないながら、カラスをよんだ勅撰集の和歌は存在し、初歩的なミスといえる。客観的事実を本分とする図録において、このような記述は見過ごしにできないものであつた。

以下、その他の候補作について略述しておく。『芭蕉俳諧に表現された漢詩文の研究』は、従来指摘のある、芭蕉作品に影響を与えた漢詩文学について、江戸初期に流布していた版本を精査して、詳細に芭蕉との関連を確認するものである。資料追跡の逐一は、総じて大業といふべきものである。しかし、芭蕉の漢詩文への学識は高度なものではなかつたといいつつ、稀購に属する文献や事象をくり返し挙げたてる針小棒大ぶりはいかがなものか。また、表題から判断されるように、本書は芭蕉俳諧を素材とした漢詩文の研究であつて、けつして芭蕉そのものの研究とはいえないものだった。

『芭蕉二百回忌の諸相』は、明治中期の二百回忌に焦点をあてて、その前後の俳壇の様相を探るといふ新機軸が評価された。ただし、「諸相」とあるように、出版物などの列挙に終始して、ふかく掘り下げた内容とはいいがたいものであつた。最後に、『小川芋銭西山泊雲来往書簡集』は、資料の斬新さでは群を抜く、興味深い書にちがいないが、学術的研究につながる評価は今後をまつといわざるをえない。

以上、委員会審議の概要を記述して、いずれの著作も、今年度の文部科学大臣賞の推薦するには及ばなかつたことを報告するものである。

文部科学大臣賞選考委員会

委員長 藤田 真一